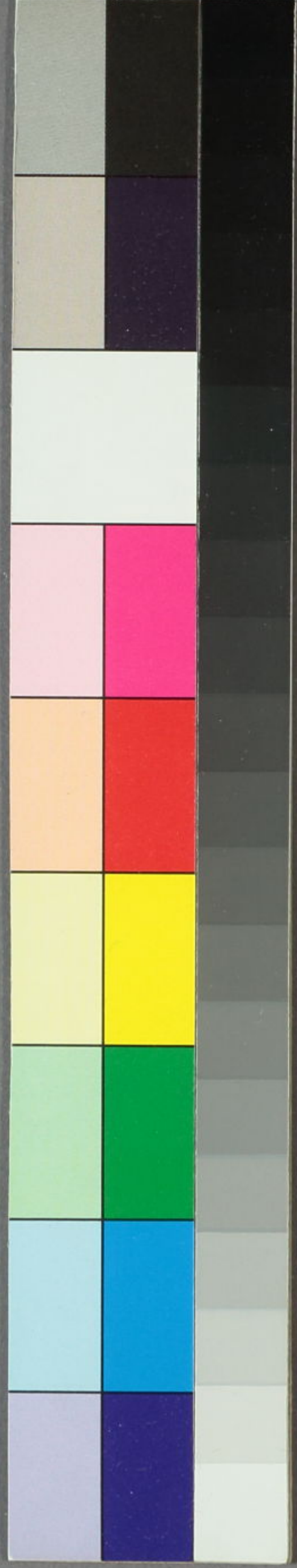


仙譜古今抄

拾遺十箇條
月之四



他諸右と抄巻之中

再校タヒスル十箇條序

蓮二之序

蓮二かくうけぬ今下拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く御子庵の
秘稿とをさし祖翁の滅後二十年ありて
ひそく白馬寺に論をありて近く我らの
家評をさしあへ遠く天下に家議を定規す
欺く者あれは難し者も阿れり人におれ
控り人におれりたるを祖翁の授けり

此借の譯明此にくらぬあり一し去るれども子
貞享式と春秋と一字此在表賤とぬくも人
事醒す辭あるんよけり中十箇條と在傳の耳と
かゝしけり一箇十知の叙文あり八例と一字此原
とるもあつて百世に及ぶの體ありんよせけぬ
け一冊と目錄と今の凡例と加して我子けおの
中巻とをあるり例と視義の口誡とおそれ例
と先師の之也とあるんやんり人しけ序よ

照あふをよ

字保と 爾二月中後

十箇條目錄

並凡例

古法可有取捨事

▲杜鵑 ▲浮見竹 ▲柳 ▲櫻 ▲萱 ▲螢 ▲杜若

▲芭蕉 ▲鰯 ▲鵜 ▲鶴 ▲鴉

此十只ハ象物ノ數量ナリ
古抄ニハ類ヲ立目訓ニ依リ
異名ニ呼テハ之凡四凡五ニテ今ノ作語ノ式同ニ座ニ只下
定タリ古今ノ取捨トハ世謂ナリ 右ハ十只ノ名同ヲ奉テ
一万物ヲ象ノ凡例ト成セリナリ 但シ柳櫻ヲ萱螢ノ四只ハ
花鳥ノ段ニ叙文ナリ 異名異射ノ差別ハ首巻ノ凡例ニアリ

去嫌可有野敵事

△父母△男女 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ △主△誰△身 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ

△独△媒 世五只ハ人倫ノ凡例ナリ △僧△寺 世二只ハ人倫ノ凡例ナリ

△帝御行△仙洞新院△鬼御 世十只ハ古式ニ色々ノ説アレハ人倫ニハ

△水鷄△之月月△尾上 世七只ハ會立息ノ各自ニテ決シテ

△魚△馬車△飯餅△茶酒 世八只ハ日用ノ物ナレハ座ニ

△松△子△日△月△更科△花 世二只ハ有ヘキナリ

△鐘△鐵 世一只ハ有ヘキナリ

△瓜△木△妻 世一只ハ有ヘキナリ

△歎△木△篠△依△々△四△維△み△家△の△首△々△水△邊

△山△伏△山△類△夜△方 世七只ハ古式ノ嫌物止ト △扇△伽

△送△火△轉△露△眠△字△起△字△虫△石 世八只ハ

△冠△鳥△帽子△綿△木△棉 世五只ハ古式ニ附向ラ

△雨△雲△雨△雲△雨△雲 世三只ハ古式ニ附向ラ

△生△師△走 世二只ハ古式ニモ異々各ノ月ハ消シ

△山△降△山△降 世四只ハ凡例ナリ

△山△降△山△降 世四只ハ凡例ナリ

△山△降△山△降 世四只ハ凡例ナリ

指合可有介別事

○迎○而 世二只ハ年余波ノ沙法 ○社○多○の○比○と○多○り

○不_レ多_レり_〇て多_レり 世四品八古式六丈夏上 _〇之字假名 レ氏今式三子細ナシ

○五字假名 世二品八古式ノ名同ナリ _〇老_〇親_子 世二品

ニ速懐ト成セリ今式 _〇鳴_子 _〇綱_〇花_鳥 _〇繪_〇花_鳥 _〇櫻 世五品八古式ト今式トニ去嫌ノ遠同

○和_レ紅_葉 世五品八古式ト今式トニ去嫌ノ遠同

千句_ニ有_レ一物_ノ之_事

●田_心●虎●龍●女 世四品八連能ノ差別ナリ新式

レ氏多ハ連身ノ用ニシテ能_レ借_ニ不用ナリ去_レ氏世四品ハ

花_鳥有_レ二物_ノ之_事

柳_櫻厚_風 _〇掌_八 _〇兼_千 _〇鳥 世七品八古式ヨリ一座

ハ四花ハ月ノ賞_取ニ效ヒテ一座三句 _〇冬_ノ牡丹_ハ椿_ハ梅

紅_梅緋_桃梅_櫻紅_葉山_吹 _〇郭_云 世八品八古式

二句ハ有_レ三_レキ物ノ凡例ナリ世段ノ註用ハ二句有_レ三_レキ異_〇射_ハ

日用_ニ可_レ輕_物之_事

○昔_曉 _〇疾_垣 _〇袖_襟 _〇湯_汁 _〇文_仗 世十品八古式

食服等ノ凡例ナリ世類ハ _〇後_笑 _〇照_曇 _〇植_所

總_テ射_用ノ輕_重ヲ知_レシ _〇眠_覚 _〇起_居 世十品八古式

〇耳_口 _〇手_足 世六品八古式

不可不審^ス按^ス之^事

老福神親子^{此之品ハ不審ノ理屈ナリ耳意編}

電光石火^{此五品モ前ノ例ナリ古式ニ}

推ノ不^{此等ノ謂ナリ}審^{此之品ハ亦目ノ相遠ヲ}

洞露洞雨^{此四品モ相遠ナリ}

冷字^{此ニ亦ハ字又ノ類ト云テ今ノ例ニ}

曾不及論物^{以テ連能ノ用無用ト云ノ損益トヲ知^キナリ}

雪ノ雨散^{此之品ハ佛舎ヲ難シ}

椿之花^{今式ニハ不用ヲ云ヘリ}

木^{此之品ハ古風ノ}

杖^{附^テ意^ノ附^ト}

文字穿鑿^ノ之^事

影陰^{此六品ハ古^ノ今^ノ常^ニ談^{ナリ}然^レモ}

訓^{此六品ハ}

一^{地^{ナリ}註^{用^ハ其^{文^ノ}}}

家^ニ之^事

藝^{此之品ハ佛舎ノ文法ニ}

世等ニ連能ノ用トハ 尊皇 都鳥 朝角 如四本モ例ノ
 無用トヲ知レシ 難向ナリ 總テ
 御筆ニハ新式ヲ笑言タリ 毀タリ 畢竟ハ自己ノ傳授ヲ曠
 ル古凡ノ抄者ノ筆法ナリ 世故ニ今ノ他諸ハ人ヲ毀ルニ干
 置カレ 例ノ虚実 ○稿ノ負鳥 ○百千鳥 ○啞子鳥
 ヲ察スニキナリ ○稿ノ負鳥 ○百千鳥 ○啞子鳥
 世ノ自ハ歌道ノ傳授ニテ 他諸ノ式同ニハ不用トシト
 御筆ノ文法ニニ自ヲ執成レテ 或ハ條メ或ハ條メ自己ノ
 知識ヲ飾ントスル自讃ノ右凡ヲ笑ルナリ 然レニ段ノ詮用
 ハ文字言語ノ用ニ非ス 混尚ニ中古ノ誹諧ニ敵レテ
 世十條ノ意地ヲ立ルニ言カ 當ノ秘訓ト云ク 一刀
 兩斷ノ法語ト云ル 文ノ虚実ヲ看破スレ

古今抄序目終

拾遺十箇條

月二日

一理万通序

東荅坊

今ノ抄拾遺十箇條ト自享ノ末比より 縁
 の及美商ナリ 湖南ノ字々ふられ 武江ノ歴
 下故翁の夜話と神ト云ク 一トかく十條の
 標目と云ク 一ト故翁ト云ク 世ノ力リと云ク 孫
 獅子庵の遺稿ト云ク 五秘の一帖ト云ク 一
 きる也ト云ク 一ト云ク 一ト云ク 一ト云ク 一ト云ク 一ト云ク
 貞性の御筆ト云ク 一ト云ク 一ト云ク 一ト云ク 一ト云ク 一ト云ク

ちれハ中右の誹諧ともしく時と連音の式目と
 以て亦ハ似テ失火ハ池魚の殃ソチハイとおそろふ一々記
 志されしもの魚ハ腐れひくもしく人めめ好
 ありて滅ねの撰集よりとこれとかくて
 遺稿のつく一果もくよあねハ彼ア十論ハ
 象評と中あらせけり十條ハ象評とア合
 下物ハ二十年の要とすくハ皮下の傳説ハ
 耳と地をききとて世之人ハちほとて例ハ
 違ハの之地と忘へくハ評ハおそろふきけ事也

寶永辛卯二月日

拾遺十箇條

○古法ニキ可ル有ル取捨事

中右ハ誹諧の法式と連音ハ一ある物ハ誹諧ハ
 一とありとあり物ハ一とありハ一とあり物ハ一と
 ありとありとありとあり物ハ一とありとありとあり
 面ハかりしてたこと連音の差ふとあをれと
 せられとたとありとありとありとありとありとあり
 する物とありとありとありとありとありとありとあり
 法嫌とありとありと天象地形より草木をのりて

悉然食服も目もきら耳もひく物とん悟
 べきをさある一をれいさといふ人の制とてさし
 我と用推とある一も也指合とと倍汝の指子
 あれいも余波のあさありてありん能階
 てし我とさる一もさる一連音と能階い何す
 の亦うゆらうせし何すのはうおろれりあん能階
 と能階の遠自とと也せとく中ちの能階より
 各教の増減さる事と和訓のほくもさると杜能
 とつひ音語の牡丹とぬるも物とよおる一連音
 い和訓の二あれと能階と音訓の二とるはるを

和漢のきろいあう音訓も一各せおる一能の
 百約におる一物名の二もさん今能階の世はより
 論とい字文の端此不核特とよ一はとと今能
 能階より古代の名目ととむくもさるい牡丹の
 在^ナ撥も或を踏皮のわんといひ或をわく^ナ解とよ
 時と折ととる一面と形りて又うしとるしとる一を
 と踏皮の牡丹とさるくと^ワ後^ワ靴のわぬりととい
 解の牡丹とあうくとおさ熱の膝くととよ能階
 い例の違ちよりわけて能階の牡丹とあはてとと
 異なるとい解とに古今の差ふとさる人もさる也

けりとの中右の能事よひの火と掃ふのまの御座
 して神代に代なと字のさうやせかくと姿持の
 きりひより千式といひはといひ用ゑおれおれ
 捨る不もふあじんおしよや古代の取捨といふと
 四式といふ▲柳只▲櫻只▲一してま柳といひは櫻と
 いひ或は秋冬の詞とむまひてとある一とま
 られと能事よひ柳持といひは柳鯛といひおて例
 の中よりいふれとまひま柳とま柳七二名
 一辨の物あれい今此能事よひ只一といひま柳等
 といひ柳園といふま辨と例の教をいふとま柳等

とも然も食服も皆くこと例ままや▲管只
 ▲管只四式をかくのまく二座るとま一と
 能事よひの青訓も及びとまくことある一
 とま何なるまま二のまやま管か一とま
 とまの中右にまのま多あれい色くま
 一とま一とまの通の時まふまま管の物ま
 ちのまよりなるまをまかま一かこれいんま
 とまかこにまくことまといふまうまのま
 とま秋もあまうまくことある一とまを
 一とまを例として古今のまをまうまのま

▲社若▲芭蕉あしちたよけれと一あつて感の音訓
 の二とあ一或の裁入のごとをされと二ふかふいお
 各目とお月むねふ用とあ一かへたれつ▲鶴牛と
 つい▲鶴牛とつよれと音訓ついに二一とあむ
 る一程選するに和音連歌の裁入といひけ
 し向と作のはあれいせふ家もつらいつて連二号一
 ふもむとつに能潜の取とあむはをいふといふ
 とはつとを様とあむ一とて連二号此物まはと
 一似るん淡笑を我家のはあつて折倍のや
 を才一の誠せ返くし今此能潜の空を八月此

はのかよ同さふ名の象ある物と一思ふるとお
 つい様とよとつとよし見同と案のつとあ
 一たつと一と一と見字と決めのあつとつと
 一とつと字とどうあむ例のつとつと一
 各目の教量と一たの様変つて在たのた
 つと謂ふれは百所千名とつとに思ふむ

○去嫌可有辭敵事

むし此能潜も今此能潜も打越の論のあつて
 次す括め二此とつとあむなむたれつ中も人倫の

へきさへいふ面ぬり見頃とていふらゆるるべき
 うらひな約とるるあし〜人倫あし〜しつう朝
 ち〜う人倫とるるあし〜とていふらゆるる起承見守の詞
 こはゆて人のいふ面をおもひ言ふられたる父母とい
 △男女といひ目をくら耳きくらふら文名のあし或を
 自他のさしういふら或は違ひのきくらを考て
 打越の附んといふあし〜人倫の言を無かよとて
 一せうのこもららるるあし〜かもよんとも〜古おもはるる
 △こい誰△身△独△媒とていふあし〜人倫の言
 て人倫とるるあし〜とていふらゆるる此削の實権と

おもはるるあし〜かもよんとも〜古おもはるる
 打越し人倫と嫌ふとて例のよふ子とてあし△僧ハ
 人倫とあし〜とて例のよふに居る〜と色くうと
 けをもて百式とるるあし〜分ふと〜も〜△僧の打越
 し人倫とあし〜△寺の打越し承不嫌し〜と
 △親王△皇女のことと〜△天皇皇とらひ△王女とよ
 とも何の部と入ては〜△帝と人倫とる
 去て△佛所と承不し〜△仙洞
 △新院のれと人倫と承不し〜△佛と△鬼此
 ちの形と承不し〜△佛と△鬼此

打越らさしむ人倫あしむし人倫のさむ人倫
 へきせあしむし古今せきしむしを古あめりし
 △の言葉△郭△松△虫△水△仙のれを音訓かたり
 異なるしむしてこれよてあされし今能階の
 設ふし子の會さとり各とあそむ物を決し
 只いさむいさむ世況や法華の△水鷄の式と連き
 しかるしむとあれと能階の上下よかたりして二ありし
 とりのきりる語法の指令しむ時よむ上下の
 らあるしむこれれをさむしむしむしむしむし
 △の月と下とあされしむしむしむしむしむしむし

決して只いさむしむし△尾△と△ふしとありし車△は
 詞△多△用△あしむしと能階のいさむしむしむしむしむし
 曲節の艶詞し用しむしむしむしむしむしむしむしむし
 であらしむ△雨をてあされしむしむしむしむしむしむし
 ああしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむし
 △虫△魚△馬△車のさむしむし△飯△餅△茶△酒のれ
 らしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむし
 のさむしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむし
 △宵△虫△前△餅のさむしむしむしむしむしむしむしむし
 教皇とさむしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむし

の指合とて言ふこととけ例と制との増補とて
 角一とてや古来の嫌ふ物と△冠とて言ふこと
 はけ△綿と本綿とほけ△又さへやとて嫌ふ
 へ△ぬとて言ふこと△衣に持とて論とて言ふ
 ことあることけおとて言ふこと△嫌ふ物
 へ今の能潜とて言ふこと△用のけはあれとて言
 け又おとて言ふこと△用のけ例とて言ふこと
 皆く言ふに及ぶことばれとて言ふこと△用
 △深とて言ふこと△所走とて言ふこと△各の月と
 附一打鉄と嫌ふこと△古来の控と稱とて言

他を録とて言ふこと△用のけ例とて言ふこと
 右今の新敵とて言ふこと△用のけ例とて言
 へ只一とて言ふこと△用のけ例とて言
 と二とて言ふこと△用のけ例とて言
 の人知とあつこと△用のけ例とて言
 半ありとて言ふこと△用のけ例とて言
 連能の用とて言ふこと△用のけ例とて言
 こととて言ふこと△用のけ例とて言
 ときとて言ふこと△用のけ例とて言

又千と字とを併して万はのにおとさしむむとされ
 の二種の夏と譯とかくのてん一世の夏と譯と實録
 しく万の世の夏と譯とわらひもや早意は一合と
 去嫌と今の能階と論より時をよのほねの咄と
 辨あつても是に却よと界をととゆりて能くたの辨の
 とかたねふち一と本段のあつたに田力也とある
 一能階とよ一と白と時の一の作はと
 ちよとまを

○指合可有分別事

御筆より一能く一可言おと類とされし中より

可言おと一逆のてと指合の事とて之をされし御筆
 より一能の二とよとあけしてのち一指合ありと
 されしとらして例のなとあつても偏不の味
 とより一とよと後と和漢の訓美と論より中一能字
 といふ一とよと言ふあれは字中の詞としてそのなれ
 指合より一能と譯し而の訓畧あれは二とよと言
 うとして指合あつた今一とよといふは能の能とあつる
 花とるんそと此の字と譯する花とるんといふ
 一と畧あつた與而の二とよといふ一とよとむむより
 而字としての訓あつた是斯而の畧あれは物

て大和の詞よる者テハトクのとき訓畧をおへしきとい
 歌人し連音所も假名と真名とに通せられた
 不棄のころのおほくは詞をおれしかなしと
 ちりいずこの時くぬき用あれたる御筆と
 てかくのころし指令されし軽きれは先づ一
 の字はばはるをてかゝらしてさしむる
 所合の作者の字書もあつたせきとて連ナヒを
 不用して寛制の自在とふまへやの社
 いたしやうてかゝるも上下のちりしきと二句
 とさしれし何れもやと分るはと一〇とあり

とよおとくし連音と折し一はし流式と向とらうと
 舞よしあれとねくと耳よきと詞あれたる能
 の一をと折とあつて上下とあつてさしむ
 ばさしむるや或と下せるも〇かゝるなりと
 千のころしはしむるはしむる何れもあつた
 のふ遠波もさるるあつたの宮殿をよめた
 る田舎もさるるあつたのちりしとさるる
 るさるるあつたのちりしとさるるあつた
 と人の詞はさるるあつたの能書を流式と
 ばさしむるはしむるはしむるはしむる

中月も古式の字をかくまひの二字假名より五字假名
のれせり古きよりてあまふし能諧はねのお語
あるに二なくし指とおる一もや二れくの名目と
論に及ぶと志るるよ○老と迷懐と生人向の私
て今や諺笑の和まふし老を老とせしむる部は
入つ敬^レ守^レ美^レ良^レ老^レとつるを神の詞もとき久
さいはいつて○親子と迷懐とをさらくてな
をこまひやくとせられたる可し方可しよとやいも
物つて古抄の通^{ニテ}辭^{ニテ}する所より一とていふ
お月一まうへはつとつとつとつと親とまひも

子と推んし孝悌と辨より一やきしひのま
ひつくとし筆もふまひやうまはなまあるとや
或々○導子を箱とやらぬと桂木とつるま
いふあるさめさといふとつとつと合ふよなるま
してせれえつるま一○桐よ通^{ニテ}すると二つ
例や或々○まよ本も鉄の録よまよまよと桂
あつとせれ桂木よつ標つとつやとつ合つと雜と
まよと論あつとんまよと桂つるはくはる一は
えれつと○導の月○翁の花の例やまよと千式
万代の一つ十知つとつとつとつと凡雅の書

とまゝなる花ぬきよの三つと〇様と花の面を
て軽く〇相とおまを折と矯いてなる何
二つの差ふあるやむらとまの豊とつみみ
いふ秋の色とついで様と相とと折やむと
みまをとも用やむらとむらと様とあむと様
とあむらとむらとむらと我らのむらと論ら
とやむらと論らと様と相とむらとむらと面
らりて思ふあるむらとやむらと折れあむと
さむらとむらとむらと様の二つとむらとむらと
後のむらとむらと論らむらと一今選らむらとむら

の二條を指合を何のむらとやむらと何のむら
やむらとむらとむらとむらとむらとむらと
むらとむらとむらとむらとむらとむらと
のむらとむらとむらとむらとむらとむらと

〇千句有_二一物_一之_二事_一

おも連流の古式より〇鬼〇虎〇龍〇女とよれ
八千句といふ一むらとむらとむらとむらと
のむらとむらとむらとむらとむらとむらと
く能治のむらとむらとむらとむらとむらと

つよとなくおくの詞ふるに連なるの艶美もよく
はらみせん飛漉も何のあまのやさと男の對
ふと女を千るよふゆして男を百編よとあれ
おとそ丸のちるいあんと皆ましく人の氣を
くもる人とうとつことつる重栞のころもばけ
あり況やは筆の軟文も思を_{ウヤシキ}を物あつぬ
すれ俗もやゆらぬと和歌連なりよむもあれ
と飛漉とくらおゆらうらうらとや一と河
とよのこ恋物とむねともるよ一我と我は
暖暖といまき一舟馬士の鄙談とあつて

憂名と八七はおとつよと一とつよと今
つと男女のつよとつよと青訓のつよとつよとあ
は辨を例のあつらふとつよとつよとけ例と
まゝと一今_こつよとつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよとの艶詞と凡佳とけつと殿上の遊
の優美とあつとつよと今_こつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよ_こつよとつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと
つよとつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと

いづれの能潜り鄙詞とありてあむ誹諧にたて集
の傳りてありとてふや一海や公経種信のま
和漢通達の音の違ふと能潜の辨れありて
いづれくのまひきりてやとある一はるまじ
我十條の返りてくもおそろひまゝにかく建門
のまじりてのれい和歌とらるひ連言とありて
此能潜とあるとらるひ能れしに不孤起と
大道の理よりて其の故きとまゝにわすれ
新きとまゝにわすれしとまゝにわすれし
非とまゝにわすれしとまゝにわすれし

とありていづれも我ら彼とまゝにわすれし
夏し春秋の釘詰とおのの我とまゝにわすれ
十條よりて我と罪とまゝにわすれし十條あり
初よりありて我の罪とまゝにわすれし
い言とありて一まゝに再選の功とまゝにわすれ
一世の議とまゝにわすれし十條よりて二條のほ
くまゝにわすれし

○花鳥有_二物_一と事

旧式に草木も蘇のれいおのむねとて言訓

といふなり。夫各よふてをててありてとありて
 今の能楽の流儀より論をい書しと訓しありて
 きてても名とよふてにありて二つありて
 花よりある一りきとて柳櫻のつてとてと
 柳のつてありてとてとてとてとてとてと
 木のつてありてとてとてとてとてとてと
 冬とてとてとてとてとてとてとてとてと
 いふとてとてとてとてとてとてとてとてと
 けしとてとてとてとてとてとてとてとてと
 といふとてとてとてとてとてとてとてとてと

まつとてとてとてとてとてとてとてとてと
 しとてとてとてとてとてとてとてとてと
 うとてとてとてとてとてとてとてとてと
 ありとてとてとてとてとてとてとてとてと
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 お月しれとてとてとてとてとてとてとてと
 ありとてとてとてとてとてとてとてとてと
 ねを同名異辭のおとれ今て二用のてとてと
 二ありとてとてとてとてとてとてとてとてと
 きとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

と二つは二つあり一と二つは古今に世をなすとあつて
 ともどもしてみゆくは細細といひ梅橘のおま
 とつとも清くしてをあるうもとも余の竹木も
 け削りたるまもせしむけ式の清きとるふの柳を
 ちよれともちるはとあふし様をおし流されし
 かつ時とふらぬ況や草の盛衰より厚も
 益もゆるせよまもも四季のうつりけ親おふ
 凡物を削りてふしこより悲喜哀楽の妻とされ
 とをまうりも各とせよしけ一削り用たる能
 あれ二つは二つとさうよしく削りたる二つの例と

ある一削りたる四季の例はよなる山吹とくち
 ともよれを清くして論の紡れたるはちり
 二用の例ともて世にいと実なるといひしる
 といひおめるといひて百も百と二用とあつて
 四季の各目をかきんちむしけ式のあつ
 つつと削り凡物の貴賤より花きりの三つと
 月をたおきと一ねあたるせられと十知の
 削りつと一削りしと花きりの二名もを
 つつと削りよるおあれと各とを
 用つておと二削り二用の世と知し

論といは一程を今く新制表は所法は似られたる記
と破れともてはたと破らるる古今の制語と之
つせきといは例のむきるとていいて一程の爰は
いふよなるも一程の爰はと前記よくて百世に
め例とて今もあつていふかていふかといふ
あゝの懸といふや

○り用可^キ物^ニ事

右おふ○音○曉のぬらう○度○坂○袖○襟の
いふ○湯のけのいふ字をおふと一三

あれとも音を在今の字例とていふ曉の時
暮の字例とていふ一例とよきされいふ通の時
あつていふやいふ一○文も○はも訓とてい
ふむつうけられとて折とていふか
いもある一むら連能の式同とていふ
いふいふなあれ○注といふ○笑といふ○照
○植のりといふ○霧外も○起^ル格も多用ある
中も○同^ニ○耳○の○いふ○の○字も
○足の字といふくおくはま話あれは異例の
あつていふやいふとていふとていふ

記處ありてはし「余」字とて「述懐」とし「親子
 」「は」を「と」を述懐ある「これ」を何なる
 殆りぬ「或」を「福妻」電光と「天象」は「嫌」つと
 つい「鳥鵲」の「傍」として「お」あ「と」を「お」として
 「嫌」つと「民」の「電」として「お」あ「と」を「お」
 例の「不用」や「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 して「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 不審の「用」は「用」は「用」は「用」は「用」は「用」
 「と」や「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 用ありぬ「論」は「不審」として「お」あ「と」を「お」

つし「御」況「と」を「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 其「況」は「秋」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 櫻「人」況「と」を「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 人「倫」は「二」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 ち「い」ある「時」を「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 一「貫」の「日」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 洞「の」雨「は」浮「お」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 不「審」あり「け」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 の「用」あり「け」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」
 一「貫」の「日」は「お」あ「と」を「お」あ「と」を「お」

あんまの字とさきかて秋北論ありあはれ
 ておまの辨らるるやとらるるとおの下のとんれ
 への根をさるありとていへま根もおありとらる
 まおよまのめらひありてこれと不審の
 不審
 ともいひ但をとおと看破して不埒不的の認
 とやいひむ或を根ると雜とこれと標を
 論とて言ひ論とて言ひつても言とこのやる
 名あんと論あり秋字といふもむ或は論
 知るの言論を言おふ冬とをこれと紹巴
 に向つて奥儀とていへぬとてその辨とての字子

と難破してあはれのおとよ字と連なりとの面を
 まゝの能階と折と媽とや何あよけ一字の
 連なりとていひく厳重とあるやとこれと能階と
 平話とこれとの名れとていひとねい冬と雜
 と此論とて及つておしてけの早竟へ不審
 へ不審の候とておの控よとらるるまや
 但と老く述懐とあはれと根をさる秋字ありと
 古おの控とていひくまや一社の家海と一世此
 家議とけの用とていひま色返とていひて市の
 りと儒佛神のの家より今の公儀のはなま

ことしは早連能をまゝてふらして世界の人は
 まふおとをきこく古式に習ひぬかよとあぢい
 もあぢいあぢい秋ありいりかぢいりた文地
 何れもいかに秋あり暗をまきありとあれ
 又主人のふも調もあやわしくねとあぢい
 とろく論語の誠もいかに事やとて書
 能潜解の園の書屋のさしあしとあぢい
 目せささささささささささささささ
 例の自辨もよういかに我懐の躰中をいかに
 ぶとれい古式とあぢいいかにいかにいかに

いとはくむむのおあーまをた人の誠とは
 道とまをいかにいかに道と損きみる
 ありとの愛とおそろい一人に選らるん中
 式より月夜よさあふあういかに難也
 是らまやと月と天象にあぢい
 推我にあぢいあぢい早をいかに辨
 と白色をいかにあぢいあぢい二知
 うも及びいかにいかにいかにあぢい
 ちい佛のあぢいあぢいあぢいあぢい
 といかにいかにいかにいかにいかに

古今抄

五

七八百の威儀し道とて一貫此物とてさくむむ
唐土の道生は佛を仰ふあるおとあつねおの
論より世間の人よあさむむれて果を興山よ
ひきかきりるるとあつちり聴えと奇何と
仰ねよ二ふあつと悉皆成佛の二ねあると
中二つこのはとほのく頑石となく西の
い事極とてあさむむと古けとて中へさく
きとひ一万ふあるとわくときと一帯下通あると
あれりげぬと我つふ十條を故の千言と道と
ふしてはよ一ねのぬとまねとて洋やなぬと

書と信をとと今と書あさよとさうと
けよ十條の三條人として能清と今日の和
よあさひて事語とあつふふあるれり連珠の
何はよかりとてとてとての言及議と
よらと

○曾テ不及論物と事

はらうと能清の始とおのころの時と連珠と
涌泉ととて能清の能清所とて八中よ真名
とまきれ一鄙後お言の神口とまねて天地
己角の虚実とてゆとる階替のまことと

今も猶のね子のしつひに於てそれと能信と
 各にけあうけを連音のふ式になつてを
 あつた人のよ京詞ひとて一馬よ嵐とつて
 うつく今能信の言行よつて用のはたの
 お月さんおれの中よりと例といふは
 附句と繋ぎとてつとあけつて葉とい
 られそれと今を附つても附なるとこれの論
 ても及つぬせ或とて様と新ありせとむと
 つと昔ありきといふ花のよといふも花の
 あつた辨ありといふよある一とつて何なる

け様のとかく念の入るや或とて蓮の實いへせ
 蓮と花とつても実と種とおとみと蓮肉
 あつてて葉種とつてする辨ありといふは
 接おとつてもなるも種とつてもは
 の海秋と念の入るや藤人をばとつてとく
 能信とつてりて害ありといふは
 を張るねと新ありといふは
 一千州七万本もといふや
 松と他つて例のつて
 のをよ附と今能信とつて

のちありて花のさきさきなる辨ありてはさきあり
まきありてはさきありてはさきありてはさきあり
例のさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
をさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
とむくは辨語と今此辨語とありてはさきありてはさきあり
ありてはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり

○文字穿鑿の事

字より他語の字より色くの名目ありて文字
穿鑿の事ありてはさきありてはさきありてはさきあり

うせむるはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
○成ありてはさきありてはさきありてはさきあり
とて配するはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
さきありてはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
さきありてはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
大和詞の真名をさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
一字もさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
さきありてはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり
我々の書けりてはさきありてはさきありてはさきありてはさきあり

だに訓を——きんひの字の識伴達とて
 とうりさちの也トウ動りさちとてし美ありとて
 我鳥の馬とてかへもあやうらに致すのあま
 物して今のはさくあらち和の事語し同雅を
 正語の和もあつむとてそれ爾雅を爾雅の
 陣とてらうて馬とて後ひとて書し衣とてとせ
 と古抄と致し古老と敵と平書と今此能階
 一耳字の文の言らんとてわらわららるる今
 鳥の下よの鳥とてさしたるわらわらるるの

ふやせらるる——あつむとてし美ありと
 ふやせらるる——あつむとてし美ありと
 ありとてさちの也とて大いなる事とてし美あり
 のあるふは水のさく水の水のさく——形容
 ありとてさちの也とて大いなる事とてし美あり
 各疑うや或ら○流字の先牙撃し流のま
 り字の誤あり曝布のまよとち——とて例の
 子補もあり但や曝字と老人の誤も曝と
 飛泉懸水とあり流字と曝布と訓して
 流と流く人の形容より流のまよとて美訓

あんな大和いけれとふむむと一まへに片假名
 と付くまやうなまに講とあつていふまに一
 と付くまやうな馬と馬と訓とあつていふまに
 と付くまやうな佛の家と書数の字同とあつて
 他諸と人知のあつていふまに或と一詠の字に
 和文といふまに同とあつていふまに同訓異字に
 和文といふまに同とあつていふまに和文と
 連なりといふまに訓とあつていふまに詠とあつて
 以てあつていふまに詠とあつていふまに詠の字に
 古今の字といふまに詠とあつていふまに詠とあつて

一まへに大和いけれとふむむと一まへに片假名
 と付くまやうなまに講とあつていふまに一
 と付くまやうな馬と馬と訓とあつていふまに
 と付くまやうな佛の家と書数の字同とあつて
 他諸と人知のあつていふまに或と一詠の字に
 和文といふまに同とあつていふまに同訓異字に
 和文といふまに同とあつていふまに和文と
 連なりといふまに訓とあつていふまに詠とあつて
 以てあつていふまに詠とあつていふまに詠の字に
 古今の字といふまに詠とあつていふまに詠とあつて

一假名と真名とに通をいれぬ家通の字
 ちういより箸橋といひる為給とる同訓の
 穿聲をきよふ一もはて筆論のその中より
 〇註とらふ字此穿聲をいれ筆一部のち又と
 逮治應守の両式とらふ日本國の字近達と
 筆とる者といふ又辨とらふ一は微細の辨向
 へまも微細の辨名とらふ一字論を例の可く用
 あり筆^{スサ}にを又の優游とらふ一^金筆は^ハ給
 〇とらふにそら筆よ筆の字但おの七十八と
 不可嫌^クこれ新式のお越と嫌ふおのふよ

ありそれ新式を惜字此各近達のおけくま合
 一筆ひきく穿聲をいれ今その力ともめて
 けおあし骨おとちあふとありと一は
 一感滯とあし付りされけ一は條を龍の
 是まはまといふむ又らるるその及らるる
 文よ合正とらふとらるるといふよ筆字
 といふもいひこもといふもといふも不可嫌と
 といふちめよ筆の又よあふといふよ
 筆給歳とこれのよ一はよ一はのあり
 おとらるる古人の誤る一といふ今を新式

一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす
一筆の筆はさすたる世に十一の筆はさす

細款ありさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす
七十の筆はさすたる世に十一の筆はさす

一筆の筆はさす

一筆の筆はさす

又らものうまよひのまじりとて今も是をよけ殿の用を
 新式の年のまよと持ては奉りぬのうまよと用は
 ありされし新式の年のまよと通して今も是をよ
 とせむしそくは奉りぬのうまよとて今も是をよ
 てよとらるの指令も申念ありとせむと能清と
 八類ツラカウ類といひて申用の傍語とてよとせむしけ
 以下を丸くして例は古凡の早下自慢也今も選
 まるに難答合の早まをこそよとせむしと十一年此訓
 田各うて禪師センジといひは師とてよとせむしと
 とてよとせむし障子セウジといひは障子とてよとせむし和訓を

これの俗語ありてまよと大和の字釈といひ
 せむしは若おの神のまよとてよとせむし自慢の
 傍語とせむしとてよとせむし論の傍語とてよ
 奉りぬのうまよとてよとせむし新式のうまよと
 奉れぬのうまよとてよとせむし十一年のうまよと
 あり物のまよとてよとせむし十一年のうまよと
 と新式のうまよとてよとせむしとてよとせむし
 といひて例は若おの傍語とてよとせむしと
 けらとてよとせむしとてよとせむしとてよとせむし
 能清とてよとせむしとてよとせむしとてよとせむし

詠美し比喩きし詠美の遊しして世はよ人知の
用あれはくみまよれおの能借をきるるなり

○家々秘傳の事

むしりし和歌し連歌し家々の秘傳あり
折言緋血刺の所はよおしの中比の能借しおまけ
和歌し連歌しはゆいよし能と秘を伴れし
今比能借しつりしを危し入るしきりたる事詠
ともしあしはゆいよまれくの中はぬ能借しあま
とくきるるあやしきるる目と二能よきりつりて

実わつとぬおせしやは傘の不成と語らるる
秋されの秋又よきしは侍の詞よりあはし
きしまあれは秋あれはくわたりし歌をたえ違
しからしめれやあま歌者の語らるるはくを
ま夏の美をあつらぬは色とくしよひあひ
まうちの語らるる皆く麗とまをけし信し
しよし思しまあれは秋あれは実よあはし
とみゆし今まよしまされし秋されし連歌り此
用あれははゆいよまはるるはくを伴れし
はくしよし能借の用ちりより傳語の訓美

と海より一去とて物の單とけり夕暮とらまはるる
 とつひあまこを思ふとけりけりけりけりけり
 夕都よりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 とある一或るがた方兼此教文よけり此子の所
 傳の秘しむおそく書けは傳へる人ある
 として自證ナをりてち持ておそく解けられ
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 百世の人とせりけりけりけりけりけりけりけりけり
 ありけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

極むとて式目の用とありてありつるもの能後
 の曲の節とてけ詞とありてありつるもの能後
 埒のあがりむつりけりけりけりけりけりけりけり
 用るに及まらんおそくは筆の秘しと傳へる鶴
 傳起る此下に出るあれとて冬とありぬられん
 みるの秘しありぬるまはちりつりつりつりつり
 ときつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 ころころとたまをくぬりつりつりつりつりつり
 我々の世をよとひりつりつりつりつりつりつり
 ともや論とて式目の書とてつりつりつりつりつり

ま強ふういふありとを例の我のいふありて
 例の人とすといふいふもや百千等の教文の百千
 のもといふ千といふといふもいふもいふもいふも
 されいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 せよや「海」なる其教文と凡雑のあけくしき教文
 といふ海濱の夏は各といふいふといふいふいふいふ
 又いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 と他借入は授とていふいふいふいふいふいふいふ
 のいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

るいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 あれいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 花の種をいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 物といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 あいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 可といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

うて内秘が現とてけ謂ふれんやとて佛家
も秘密不定の二教あれと秘密とていふも
是もももろわの法とありけぬよ新なる一校の
花とてさげのく^{ニツコ}遊葉と^{アツ}歡肅とありぬよ此
一の貫く此道も骨髄を唯乃とてひくも
の^{ニテ}忠恕の言とて道辭とて^{アツ}發とて井とて
そわの法はありいふもそや中古のおる達の
泄儀の式目とてえくねとて歌るの秘事と
ありしや秘授とてかくの符帳とてん
ま^{アツ}一とてわれの我家の泄儀とて古とてめとて

今とてはくまむとて二刀兩断のけ^{アツ}語とてめとて
一部の秘訣とてありはりし^{アツ}書^{アツ}の^{アツ}部とて
と^{アツ}秘とていふも^{アツ}説^{アツ}とてめとて^{アツ}法
るよ秘とていふも^{アツ}及^{アツ}とて^{アツ}法
然^{アツ}識^{アツ}の^{アツ}通^{アツ}の^{アツ}場^{アツ}とて^{アツ}秘^{アツ}傳^{アツ}とて^{アツ}法
一とてわれとていふ^{アツ}傳^{アツ}と^{アツ}佛^{アツ}秘^{アツ}と^{アツ}あり^{アツ}と^{アツ}傳^{アツ}法^{アツ}
ありとて我家の^{アツ}中^{アツ}古^{アツ}の^{アツ}秘^{アツ}の^{アツ}中^{アツ}古^{アツ}の^{アツ}秘^{アツ}
り^{アツ}の^{アツ}秘^{アツ}と^{アツ}あり^{アツ}と^{アツ}新^{アツ}故^{アツ}の^{アツ}秘^{アツ}と^{アツ}あり
ありとてわれと^{アツ}中^{アツ}古^{アツ}の^{アツ}泄^{アツ}儀^{アツ}の^{アツ}秘^{アツ}と^{アツ}あり
ほ^{アツ}一^{アツ}古^{アツ}と^{アツ}新^{アツ}と^{アツ}あり^{アツ}と^{アツ}あり^{アツ}と^{アツ}あり^{アツ}

とこの口とけをもつてなまめゆふ前ふかひはた
まうとあれし我の家も能潜も古人あつても
千糸一斬の秘訓ありて百世も天下の古語と
咄断されし今此十條をきば都のまこといふこと
論とるに故能の耳とるるに能くは能くは能く
天道の恢フキニありし能潜のるともして儒門のま子
此詞よも替身して六藝の媒とあまのい流の家
と史記のゆとあるとやまされし能潜と能潜と
い各ふかの家あれし代々の武目といふすまといふ
あつれし貞享世とつりえ禄のちちまといふ

系家を辨し能潜の名とほく入と世又世の門と
あつてし書けおよ武目とさるに今此武洛の
系匠家ゆつれおしとこ十糸おもあつた
とめく長次老人の法年とめく能潜と能潜
い能潜も能潜もあつたはとあるとさるに
我門の古老とよます持めきし此通とさるに
おゆしとめくお尋の遺誡はらりし十糸年
とさるに能潜の辭おとほきつていふことと
とさるに能潜とさる古風の附方とほきし
とねるを例の二とさるに能くは能くは能くは
遺誡

と識文とをあらうまゝおろして我もよし
願下せえとあつきていふはとほとひらぢ
そらう人の大任あつてもやらのあつ今
の我もあらう我とおもふも儒御を家
の美とあつて歌陣の弱とあつて
いふれいといふいふ書の内容はめり
酒のほほとあつて高遠虚誕の海名
もあつていふいふいふのいふ
てそらう人のいふもあつて我もあらう
いふいふいふいふいふいふいふ

まゝてあつてあつてあつてあつて
おれと儒御の内秘も能くあつて
あれいといふ者といふ遺命とあつて
今といふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ

十箇條月々の終

